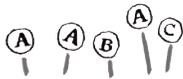


—中高一貫校における授業—

英語を実際に使う授業の実践

法政大学中学高等学校

木村 越



本校は、2006年度から2008年度の3年間、文部科学省からSELHiの指定を受け、研究開発課題を「多面的なTBL (Task-based Learning) の導入により英語コミュニケーション能力が飛躍的に向上する授業法・教材選択・カリキュラムの開発」として取り組んできました。

今回はNEW CROWNを用いて行っている中学における指導実践について報告したいと思います。

1. 本校の英語教育の目標

本校は中・高6年間で「英語力と国際性」、「コミュニケーション能力」、「豊かな感性」を育てることを目標としています。具体的には、英語で書かれた内容、話された内容を正確に読み、または聞き取り、それに対して200語～300語で批評を書ける、または考えを述べるができる力を高校卒業時まで身に付けさせることです。

中学段階では、NEW CROWNを用いて様々なアクティビティーを行いながら、自らの考えを英語で話す機会を定期的に設定し、それに向けての準備活動を通じて、必要となる基礎力固め、実践力につなげていけるよう指導しています。

しかし、特別なカリキュラムではなく、中学1・2年生では英会話を含め週6時間、中学3年生では英会話を含めて週7時間となっています。教科書はいずれの学年もNEW CROWNを使用しています。先取りを意識したカリキュラムを組んでいるため、どの学年でも2学期には学年で学ぶべき範囲を一通り終えて、3学期に次年度の内容を見据えた発展的な学習内容を学ばせたり、それまで学んだことを実際に使わせながら発表する機会を確保しています。そのため、毎回の授業も訳読中心の形式ではなく、教師による講義型の授業から生徒活動型の授業になるよう心がけ、授業づく

りをしています。

また、本校では、中学2年の3学期に生徒全員がオーストラリア・アデレード語学研修に参加するプログラムがあります。この語学研修が英語学習の大きなきっかけの一つとなっています。

オーストラリア研修の前は、自分が現地に行った際に使うであろう英語表現を、実際の場面をイメージしながら学んでいきます。最初はぎこちなくしかできない表現も、繰り返し練習する機会を与えていくことにより、生徒達にも自信をつけさせることができます。これは特に英検3級以上の2次面接をイメージした取り組みに対しても有効となります。

また、語学研修から帰ってくると、自分が伝えたかったことがきちんと伝えられたという達成感を味わう一方で、もっともっと自分の意見を正確に伝えられるようになりたい、相手の話をきちんと理解し、世界の文化を深く知りたいという気持ちを持つようになります。多くの生徒がそのまま進学していく本校のような付属校の場合、なかなか明確な目標を持たせることが難しく、こうした機会は英語学習に対するモチベーションを上げていく上で大きな役割を担っています。

しかし、語学研修があるから英語を勉強するというわけではもちろんありません。語学研修は2008年度中2の生徒から実施しており、それ以前はそのようなプログラムがありませんでした。そのような中、本校が英語教育を単なる受験勉強のためのものではない、コミュニケーションのためのものであると位置付けてきた取り組みが英語面接です。

英語面接は、中学3年生の生徒に対して行っているものであり、卒業・高校進学にむけての取り組みとして位置づけて行っているものです。詳細

は後述致しますが、与えられたタスクに対して英語で答えていく形式です。以前は日本語教師で行っていましたが、現在ではネイティブ講師で行っています。自分の考えを発表することには、日本語でさえ少なからず抵抗を感じる生徒もいます。さらにそれを英語で行うということは生半可なことではありません。このことは大学を卒業した社会人であっても同じであろうと思います。初めての経験であれば、誰だって緊張するものですから、その経験を早い段階で、中学生のうちに経験させることができるのは、その後の生徒達の人生にとってみても大きな収穫であろうと思います。与えられたタスクに対してきちんとした準備をして、完璧にこなすことも大切なことですが、その一方で、うまくいかない、失敗する経験をさせてあげることも同様にこの時期の生徒にとっては大切なことであろうと思います。そういった意味でこの英語面接は、どのレベルの生徒にとってみても今後の自分について見つめ直すよい機会になっているのだと思います。

また、3学期には、スピーチコンテストを実施しています。中1は教科書で学んだHumpty Dumptyの暗唱、中2は「オーストラリア語学研修に向けて」というテーマでのスピーチ、中3は「夢」というテーマで100単語以上のスピーチをします。各クラスで全員参加による予選会を授業時間内で行い、生徒同士による採点と教員の推薦で選ばれたメンバーによる決勝を、スピーチコンテストとして全生徒の前で行っています。これは、生徒および教員の投票で各学年の優秀者を決める形式です。教科書を通じて学んだことを技術的に上手に表現するのではなく、むしろ、題材に対して自分の考えを持たせること、そしてそれらなるべく簡単な表現で（英語で考えて英語で）伝えられるように指導しています。

2. 具体的な実践

中1では、英語学習初期段階において個人を一人ずつ見ていく機会を設け、きめ細かな指導と学習意欲向上を図ります。英語を目で見えて覚えるのではなく、まず耳で聞くことから始め、それを声に出してみようという母国語を習得する際に行ってきた方法となるべく一致するように、聞く機

会、発音する機会を保証します。訳読中心の授業になると、どうしても教師による講義形式が中心となってしまいますが、生徒中心の授業形態を心がけることにより、生徒が英語を使う時間が増えます。また、訳読中心の授業よりもよりスムーズに授業を進めていくことができるのも特徴です。このことにより先取り教育が可能となっています。

一学期には教科書の音読テスト、二学期以降にはインタビューテストを実施しています。制限時間を設けての音読や、英問英答の練習を反復させます。教科書は、レッスンごとに日本語から英語に訳す事ができるように本文の音読を繰り返して行います。またインタビューテストは単語だけで応答するコミュニケーションの回避のため、文で応答する事、またYes、Noの他に、もう一文つけて発話するという条件のもとで行っています。

中2では、段階的に目標を高めながらスピーチの指導を行います。相互評価にコメント欄を入れることで、聞く側も集中し、フィードバックされたものを生徒に還元することもできます。自分のスピーチを周りの友達がどのように受け止めたのか、食い入るようにコメントを読みあさる姿が見られます。

本校では学習内容の先取りを実践しているので、どの学年も3学期は教科書で学んだことをベースにしなが、より実践的な内容に取り組みさせています。中2では、3学期後半に控えたオーストラリア語学研修のための表現のトレーニングや、実際にホストファミリーと手紙などでやりとりをしながら体験的学習を進めていきます。

これら3年間の集大成として中3では、中1、中2で経験したスピーチコンテストの他に英語面接を行うため、表現することを主軸とした英語学習を以下のような取り組みで行っています。

<暗唱>

NEW CROWNを用いて、教科書本文の暗唱を反復します。

- ①本文の予習（課題として事前に出しておく）
- ②リピート（教員の後に続いて読む）
- ③教科書を伏せてリピート。
- ④伏せた状態のまま日本語から英語に。
- ⑤5分から6分（内容に合わせて変更）準備時間を与えて暗記させる。

⑥日本語から英語にしたものをノートに書いていく。

⑦一人一文ずつ暗唱発表。その日の最後に全文を一人で暗唱発表

毎回の授業で上記の方法を用いて暗唱能力を少しずつ高めていきます。英語は個人で学習する部分と、コミュニケーションとして対人関係の中で育てていく部分と両方を持ち合わせているので、その両方の要素がなるべく含まれるように、個人で覚えたり、確認したりする時間を与えることと、それらを人前で発表することの両方を大切にしています。細かなミスをなるべく個人の確認の時間に済ませて（他の人には間違っただけがわからないようにしてあげて）、ある程度の自信をつけさせた状態で発表に持っていくことを大切にしています。また、1学期など学年の初期段階では、英語力がある生徒にまとめの発表をさせることで良い模範とし、同時に英語に興味がある生徒はどんどん先に進んでもらう機会とします。そうした中で、少しずつ生徒の中に自分もチャレンジしてみたいという気持ちを育み、これまでチャンスに恵まれなかったレベルの生徒にも発表をしてもらうように切り替えていきます。この段階になると、周りの生徒達も発表を聞きながら、自分も心の中で同様にチャレンジし、最後までできたときに自然と相手を褒めたたえる気持ちをもってくれるようになります。

また、英作文は毎回の定期考査で出題し、それぞれ100単語以上の内容で自分の考えを伝えるものになっています。テーマは教科書のレッスンで学んだトピックから、自分たちの学校行事などに関わりの深いものを選択して提示しています。

例えば、1学期であればオーストラリア研修から帰国したばかりですので、「オーストラリアで学んだこと」について、佐々木禎子さんのお話と、本校の修学旅行が広島、長崎の平和学習を行っているので、「平和とは」というテーマなどで出題しています。様々なことに対して自分の考えを英語で考え、英語で表現する癖を養っていきます。そして、それらが最終的に「自分の夢」というテーマにつながるように指導しています。原稿作りは、2学期中間試験で課題にし、仮原稿を完成させ、そのうえで、キング牧師のスピーチを聞かせ、

スピーチとは何なのかを学習し、原稿の直しを作らせませす（下書き）。その後、文法的な間違いなどを訂正し、清書を作成させませす。

この段階で、ネイティブ教師に生徒の原稿を読んでもらったものをインターネットのストレージなどを利用してデータ化し、生徒が自宅で自分で練習できる環境を整えます。生徒も自分の書いた原稿をネイティブ教師に読んでもらえることに対して興味があり、また、その後のクラス予選も控えているので何度も聞きながら練習していきます。

そして、本校が行っているペアレンツウィーク（授業参観）などを活用し、一度クラスメートや保護者の前で実際にスピーチをする練習をしています。

3. 英語面接について

上記のような準備期間を経て、本校ネイティブ教師との一対一の英語面接に移ります。これは、キング牧師の演説“*I have a dream*”の中からいくつか段落を提示し、それらを暗唱することから始まります。キング牧師に関しては、NEW CROWNのLesson 6を学ぶ際に、背景となる事柄に関してビデオ教材などを活用しながら学習し、そのうえでキング牧師の演説を実際に聞くことで、様々なことを実感してもらいます。音読とスピーチの違いを認識してもらいます。

英語面接で問われる内容としては、キング牧師に関する質問を英語で答えられるかどうかということと、“*My Dream*”を英語で伝えることの大まか2点です。キング牧師に関する質問については、ネイティブ教師と事前に打ち合わせをしておきます。ネイティブ教師は面接に対して集中してもらいたい意味もあり、英語面接の評価は第3者（学年の英語担当）が別に行っています。これは成績に直接反映されるものではありませんが、Certificate（修了証）を渡す形で評価にします。項目は大きく3つあり、accuracy（文法・語彙の使い方の正確さ）、fluency（流暢さ）、contents（スピーチの内容、発音）をそれぞれA（優秀）B（普通）C（乏しい）F（失格）で判定します。基本的には生徒の学習を励ます形で行っているため、よっぽどひどくない限りFはつけませせん。また、

実際に行ってみるとわかることですが、定期試験上位者が必ずしも良い面接をするわけではなく、逆にそれまで英語学習で活躍することのなかった生徒の意外な側面（実は英語が好きだった、コミュニケーション力に長けていた）に気づかされることとなります。ここには、日本人教師の生徒に対する評価とネイティブ教師の生徒に対する評価のgapもあり、非常に多くのことを学ばされます。

そして、スピーチの内容が“My Dream”ということで、自分の将来に関してどのように考えているのかを具体的にさせていくための質問を行っていきます。自分の夢に関してイメージを持つことができても、それをいかに実現させていくかについて無頓着な生徒が多いのも実態です。授業担当者、担任などの日本人教師から言われる以上に、ネイティブ教師から英語で淡々と問いかけられていく中で、生徒自身が自分の道について発見していく様子が見られます。

これらすべてを一人あたり10分ほどで行っています。本校では生徒数が1学年約140人ほどですので、1400分＝23時間20分ほどの時間がかかる計算になります。年度末処理の多い3学期の、貴重な放課後の時間をどのように捉えるかは様々あるでしょうが、この23時間20分がその後の高校3年間、大学4年間につながるものであると信じて行っています。

4. スピーチコンテストについて

本校がスピーチコンテストを行うようになったのは、SELHi指定を受けてからです。最初は単学年での実施でしたが、2009年度は中学全体でのスピーチコンテストを行うことができました。

まず全体の流れとしては、2学期の段階で各学年でスピーチコンテストのテーマに基づいた予選を行います。予選は授業時間を用いて、全生徒を対象に中1は暗唱、中2・中3はスピーチを行います。これを生徒が相互評価し、決勝に進む生徒を決めます。項目は大きく3つあり、accuracy(文法・語彙の使い方の正確さ)、fluency(流暢さ)、contents(スピーチの内容、発音)をそれぞれ3点ずつ計9点で記入させます。クラス全体の集計がそのまま結果となりますが、これ以外に担当教

員からの推薦枠も設けてあります。

また、英語に対する高い意識を持ち、惜しくも予選で敗れた生徒達には司会をさせます。こうすることで、英語がとにかく好きで成績上位の生徒も、この生徒が活躍すれば全体の底上げにつながるという生徒も壇上にあげることができます。

事前のリハーサルでは、発表する順番を決めるためのくじ引き(draw for the order)の手順、マイク・ホールを使用してのスピーチの練習などの確認を行います。特にMCとなる生徒達にとっては、中学生徒全体を仕切る力と、それらを英語で行う力の両方が求められるので入念なりハーサルが必要となります。なるべくリハーサルを早めに一度やっておき、その後各自が練習する時間を持てるようにすることも大切なことであると考えます。

こうして迎えた当日は、各学年の発達段階を目の当たりにすることができる場となります。下級生は同級生の発表に刺激を受けるだけでなく、上級生の発表を聞くことで自分の1年後、2年後をイメージすることができます。また、上級生は同級生だけでなく、下級生にも見られているという気持ちから、これまで以上に準備をします。そして、そのモチベーションは決勝の舞台上上がった生徒だけでなく、その他の生徒に対しても「次は自分が」という気持ちを抱かせます。本校では、中学のスピーチの経験を高校の英語学習でも保証していくためのいくつかのカリキュラムがありますが、そのうちの1つである高1のスピーチコンテストでも中学の頃から活躍している生徒もいれば、全く想像していなかったような生徒が高校で活躍している姿も見られることからわかります。

英語は使うためにある、そのことを実感として気づかせるための取り組みを用意することと、その取り組みを一発限りの花火として終わらせないための日々の授業の在り方、生徒が英語を実際に使用する授業づくりを今後も検討し続けたいと考えています。

